No.34
2008. 3. 10

地球の木

地球上のすべての人たちと共に生きたい

CONTENTS

●一歩ふみだそう　この社会の仕組みを変えるために……1
●マンガルタール村の高校生と共に過ごした4日間……2
●マンガルタール村の暮らし……3
●結婚式ではしご酒……4
●ユースクラブが地域に新しい風を～……4～5
●シルク小物完成間近！……5
●地球の木連続講座に参加して……6
●大仏さまに見守られて……6
●地球の木サロン「アロマテラピー」……6
●バングラデシュ・サイクロン緊急支援報告……7
●自分の足で歩き始めた2人……7
●グローバルアイ「軍隊と人道援助」……7
●活動日誌……7
●INFORMATION……8

一歩ふみ出そう！

この社会の仕組みを変えるために

地球市民教育チーム　中野真理子

地球の木連続講座「一歩ふみ出そう　私のシンプルライフ」の第1回、田中優氏講演会「温暖化防止のための“もうひとつの”選択」が1月20日、横浜市市民活動支援センターで62名の参加者を集め大盛況のうちに開催されました。

具体的データに基づく講演は大変説得力があり、また、様々なアイデアに溢れた解決策が示されました。アンケートの回答も「社会の仕組みを変えていくという視点がとてもよかった」「皆でやれば絶対によくなると希望が持てました」など参加者の熱い思いが伝わるものでした。

世界の戦争、紛争はそもそも石油や天然ガスなどのエネルギー資源を求めての争いであるということ。最大の環境破壊行為であるこの戦争を避ける努力をしなければ、温暖化を防止することはできないという指摘がありました。この資源については石油40年、天然ガス61年、ウランは64年しかもたない。唯一石炭は227年分あるが、CO_2排出が3割も多いので選択は難しい。私たちの暮らしに最も身近な石油の生産量はピークを迎え、一方消費量は中国など新興国の急激な伸びもあり、どんどんふえていく。需要に生産が追いつかなくなる時点をピークオイルといい、それは今かも知れないということでした。従って、100年後を考えると自然エネルギー以外の選択の余地はなく、そうした選択をすることにより、資源を奪い合わない、環境を壊さない、強い国家を必要としない、地域主体の社会へと変わることになるというとても興味深い指摘でした。

また実際に私達の家庭で排出するCO_2は日本全体の排出量の1/8だそうです。家庭内の電気消費の四天王はエアコン、冷蔵庫、照明、TV、これで電気量の3分の2を使用しているが、これを省エネ製品に買い替えると電気代が半分になる。

省エネすることで、使うエネルギーを減らしてから、自然エネルギーを導入していこう。今まで原子力は我々のこの暮らしを維持するための必要悪といわれてきたが、同じ便利さを省エネと自然エネルギーで実現できれば、原子力発電所はいらなくなるという嬉しい可能性を示されました。

しかし日本のCO_2排出量の8割は電力、産業、車です。その大きな原因に対する解決策として、産業用の電気料金システムを変え、使えば使うほど高くすることで、電力ピーク時の消費量を削減するという提案もあり、なるほどと大きくうなずいたのでした。

地球の木が掲げる“シンプルライフ”とは「持続可能な暮らし」や「自立、自給できる地域」などの意味を込めています。支援地の村では、食はもちろん、家も道具も、何でも自分たちで作りだすというような、自給的な暮らしが今も続いています。ガスも電気も水道もなく、いわゆる便利な暮らしとは無縁です。そんな村の人々に温暖化について尋ねたところ、ネパールでは「氷河湖の決壊のことなど知ってはいるが、毎日の生活でそれどころではない」という答え、ラオスでは温暖化という言葉さえ知らないということでした。シンプルライフにシフトしなければならないのは先進国の私たちです。私たちのメタボライフから、個人のライフスタイルを超えてどう一歩をふみ出せばいいのか、地域で、社会で、何を具体的に選択していくのかその方向性をみんなで考え、語り合う場を提供することも私たち地球の木のこれからの大切な役割であると思っています。

＊p6に関連記事を掲載。詳細は別紙報告をご覧ください。

■発行 特定非営利活動法人 地球の木 理事会 ■発行責任 丸谷士都子 ■編集 広報部 ■事務局 〒231-0032 横浜市中区不老町1-3-3フェニックス関内2F
■TEL 045-228-1575 ■FAX 045-228-1578 ■E-Mail:chikyunoki@e-tree.jp ■http://e-tree.jp

マンガルタール村の高校生と共に過ごした4日間

ネパール調査 2007年11月29日～12月6日

ネパールの新規プロジェクト「幸せ分かち合いムーブメント」の調査のため現地を訪れた。今年度は、高校の設備を充実させ、専任の教師を確保し、奨学金制度をスタートさせた。それぞれが計画に沿って着実に進められているのを確認してきた。

来年度からは、「村人の収入創出プログラム」が始まるが、そのための状況調査も今年度の計画の一部だ。カトマンズの大学に行くには資金が足りず、村にいても職がない。そんな若者たちの不満に対し、村で活躍する人材育成も見据え、奨学生を含む高校生たちを中心に、その調査のためのトレーニングを行った。今回私たちもそれに参加する機会を得た。高校生たちは村の人たちからの信頼もあり、これからの村を育てていく希望の星と言える。

地域にどのような課題があり、どのような支援が必要かは誰がわかるのだろうか。外部者でもなく、村の権力者でもなく、村人自身である。高校生たちが自分の住んでいる村の人たちと共に村を歩き、一緒に状況を把握していく。これは、PRA（主体的参加型農村調査法）と呼ばれている。

4日間集中トレーニング

進行役は、3人のSAGUN（現地パートナー）のメンバー。カマルさんは自然体で参加者をぐいぐいと惹きつけていく。シュレスさんは文化人類学の教授で理論部分を担当する。タマン族のサルバジットさんはこの村で信頼が厚く、笑顔で語りかける。この3人の絶妙な連携で和気あいあいと進められた。最初は緊張していた参加者たちに笑いが起こり、みるみる心がひとつになっていくのがわかる。

1日目	開会式　開発とは？　懇親会
2日目	PRAの手法を学ぶ
3日目	実地トレーニング
4日目	ふりかえり　計画づくり　終了式

トレーニングは、開発の同義語を5つあげることから始まった。グループごとに出てきたのは、「進歩」、「創造性」、「繁栄」など、いいことばかりだ。そこで、開発という概念がネパール本来のものでなく、外国から輸入されたものであることをシュレスさんが解説する。カマルさんは、ゲームやロールプレイで、村の課題を一番よく知っているのが村の人であることを気づかせていく。その後、関係づくり、状況分析、計画、資源管理、評価など開発の行程について学び、すべての行程において地域の人が関わる必要があることを学んでいく。

次に、状況調査に必要な方法を具体的に学ぶ。地形や家を地図上に描く「社会マップ」。人々の動きを知る「移動マップ」。季節ごとの農作業や行事、病気などを知るための「季節カレンダー」など。絵や村にあるものを使うことで、字が読めない人たちにも一目瞭然の方法である。

自分たちの住む集落の「社会マップ」を作って発表

実地訓練はピンタリ集落で行われた。村の人たちに集まってもらい、調査の趣旨を説明する。高校生たちは4つのグループに分かれ、村人たちの助言を得ながら社会マップなどを作成していく。世帯数約28の集落のデータが集まっていく。集中トレーニングの後、この方法で人口4,261人のマンガルタール村全域の詳細な基礎データが、それも村人参加で揃うことになる。

頑張っているこんな顔あんな顔

サルバジットさん
SAGUNがムーブメントのために雇ったプログラムコーディネーター。
マンガルタール村の主要民族であるタマン族は独特の文化と言葉を持つ。村びとと共に開発を進めるためには、タマン族出身の彼がうってつけだ。5年間教師として仕事をしてきた彼は音楽に秀で、見事な横笛を披露してくれた。

ラトナ君
村内でムーブメントを推進するポストを募集したところ、3名の応募があり選ばれた。大学教養課程を卒業したばかりの20歳。新婚ほやほや。得意の踊りと太鼓で場を盛り上げる。

ディパク・ダハルさん
学校には、高校ができたものの専任の先生はおらず、下の級の先生たちに教えてもらっている状況だった。そこで給与の半分を支給し、主要科目であるネパール語（文学）の教師の彼を雇った。

ふりかえりでは、様々な感想が述べられた。「村人とよい関係をまず作ることが重要だ」「この調査が将来村人の利益につながることを明示することが大事」「村の歴史がわかった」「村人の参加が多いほどたくさんの情報が集められる」。そしてどのグループも、「自分たちにもできる」と自信を見せた。

今回、生活を共にし、トレーニングに参加したことで、高校や村の暮らしがより身近になった。若者たちや村人たちとの交流ができたことも大きな収穫であった。地球の木との関係づくりは一歩進んだが、まだ始まったばかりだ。地球の木の「共に生きたい」想いを伝え、本当の「幸せ分かち合い」になるように、カマルさん、そして村の人たちから学んでいきたいと思う。（ネパールチーム　丸谷士都子）

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

マンガルタール村の暮らし

私たちが泊まったのは学校前に建つ、校長先生の親戚の家。食堂を営んでいる。電気も水道も通っていない村と聞いて覚悟していたが、店の隣には山の湧き水が流れ、そこで小さな発電機を回していた。夜には裸電球が灯った。朝は5時半過ぎから外がにぎやかになる。店の前の水場に近所の人たちが集まってくるのだ。ホースに湧き水を通してあり、それをみんなで使う。水が出てこない時もあるが誰もあわてない。少し待てばいいだけさ、今、上の集落で使っているから。自分たちが使い終わると、さらに下に伸びたホースに先をつないで次の水場に回す。学校が建つこの集落はマンガルタール村の中心で、奥にはバザールもあり、インドや中国からの輸入品も売られていた。

水場風景

村を訪問したのは、収穫後の一年で一番豊かな時期で、結婚式シーズンだった。村滞在3日目に奨学生の一人、ラムシンのお姉さんの結婚式にお邪魔することになった。彼の集落は山の上。ワークショップ後学校を出発し、山を登ること2時間。寝袋持参なのでかなり重い。この距離を毎日通っているのか……。あっという間に日が落ちて、あたりは真っ暗に。3日間シャワーはもちろん着替えてもいない服装で、汗までこんなにかいてしまった。やがて遠くに明かりが点々と見えてきた。ラムシンの集落では小型水力発電を組合で管理・運営し、全世帯が電球1個分の電気を得ているという。電力過剰な日本では地球温暖化の悪者の感があるが、ここで見る電気は心安らぐ希望のともし火だ。

夜遅くなって始まった結婚式

式場はラムシンのうちの庭。むしろを敷いた冷たい土の上に、仕事を終えた村びとが野良着のまま三々五々やってくる。受付もご祝儀もない。家の一階は土間・台所で二階が寝室。寝台と壁を家族みんなで共有し、ありったけの持ち物を壁につるしている。茶色くなった本が大切に並べられ、ラムシンは中から新しい本を1冊取り出した。10年生修了試験で使った英語の教科書、宝物だ。夜遅くなって始まった宴では、小麦粉を練って揚げたシェルという菓子、そして水牛の煮物が出された。シェルは味がなく冷えて固かったけれど、これは花婿の家で朝から女総出で用意した愛情一杯のおもてなしなのだ。

子どもが遊ぶ傍らで水牛やヤギが寝そべる

この集落はマンガルタール村で一番豊かだという。まとまりがあり、タマン族の信仰するチベット仏教の仏塔もきれいに色彩が施されていた。それでも人々は着の身着のままで、家畜と人と、土壁の家やくねくね道がこん然とした、茶色の風景が広がる。学校へ行かない子や裸足で真っ黒な顔をした子もたくさんみかけたし、集落の中にも格差があると感じた。ここはあくまでも入り口。小学校にも通えない子ども達のために、そしてもっともっと貧しい集落のために、村の高校生たちには頑張ってほしい。村全体で豊かになるのだという雰囲気作りが、ムーブメントを側面支援する地球の木やSAGUNの大きな役割だと実感した。

（ネパールチーム　関川渓子）

奨学生（11年生5名、12年生5名）
難関の10年生修了試験に合格しても、高校に行くには都市に出なければならなかったため、進学をあきらめる子が多かった。しかし一昨年村びとが自力で高校を増設し、貧しい家の子たちにもチャンスが生まれた。一人毎月約1,000円の奨学金を受け、授業料、教材費などをまかなう。

私の名前はアンジャナ。
歩いて2時間かけて通学しています。6時40分から始まる授業に間に合うように頑張ってるわ。学校は10時半に終わります。高校生ともなると、そのあと一日働かなくてはならないからです。幼稚園の先生をしています。

僕の名前はラムシン。
高校を卒業したら社会サービスに関わる仕事がしたいです。それと僕は、ネパールを世界中の人たちに見せたいです。「地球の木」が僕たちの将来のことまで考えて奨学金をくれること、本当にうれしいです。これからも皆さんの温かい支えをよろしくお願いします。マンガルタール村にも遊びに来てください。

from Laos

大雨を降らす雲が去り、乾季となる11月～4月のラオスでは、結婚式の招待状が次々と手元に届きます。知り合ったばかりの人からも「来週結婚式あるの。きっと来てね」と、宛名が印刷されたピンクやブルーの封筒が渡されます。それが大抵、週末に集中していて、同じ日取りで3件の招待状をもらう日もありました。「どうやって行く？全部に出られるかなー」と知人に相談しながら時間調整し、この日は結婚式のはしごです。雨季の間は式を挙げない慣習があるために、この時期を待っていました！というように町のあちこちの庭先で華やかなテーブルの準備が見られ、夜には披露宴で流れる音楽で賑やかになります。

式の日の昼間は、新郎が親族や友人と共に新婦の家に向かう「婿行列」が行われます。おてんばに見えていた22歳の友人新婦の家に行くと、真っ赤な衣装（ショールとスカート）をまとい、金色の装飾を身に着け、髪を高く結って見違える美しさで、慎ましく新郎の到着を待っていました。一生に一度の儀式に緊張していないの？と尋ねたら「全然緊張なんてしていない。一緒に写真撮りましょ」と、これから家庭を支える頼もしさが伝わってくる余裕の笑顔。しばらくして、27歳の新郎がロウソクに火を点しながら、ゆっくり歩いて行列を連れて新婦の家にやって来ました。伝統的な祈祷と、手首に糸とお札を巻く儀式が1時間以上続いた後、皆でお酒を交わす場となり、新婦よりも、新郎の方が緊張している様子でした。

その夜6時頃からは、別の新郎新婦の披露宴へ。やはり新婦の家で開催され、総勢100人程のテーブルが隣家の庭先に渡って用意されています。ここでの新婦さんは、優雅な青い衣装。「皆さん、飲んでいますか？」と、テーブルの給仕は親類やその子ども達が担っています。ごちそうは、朝から近所の人々が手伝って準備されたもの。人々が揃い、お酒がまわった頃に音楽が始まり、輪になって皆が踊り出します。延々と夜中の12時過ぎまで続く場ですが、楽しさの途中で、私はもう1軒別の披露宴へと向かうことに……。

こうして数ヶ月の間にラオスでの結婚式にいくつも参加しました。どの結婚式でも、招待状の配布から、当日の準備、来客の持てなしまで、新郎新婦を祝福する親戚、近所の人達が協力し合っていて、ほぼ手作りで行われているのが共通です。この週末もどこかの庭先の賑わいが聞こえてきそうです。

（JVCラオス事務所　尾崎由嘉）

from Nepal

ユースクラブが地域に新しい風を～

ネパール教育支援プロジェクト現地調査報告

2月13日～21日、ネパールチーム代表の米林大作が現地を訪れた。今回の調査の目的は、支援終了まであと1年となった支援地の全体的な状況を知ること、そして支援終了後の「地球の木」と現地NGO「SOARS」との交流プログラムを話し合うことに加え、ネパールでの識字教育の成功例を紙芝居「デブラニ物語」にまとめるということである。そのため広報チームでイラストを担当している斎藤和子が同行した。

ネパールに到着後、まず聞かされたのは、ガソリン・灯油・電力の不足、物価の値上がりなど、庶民生活が苦しくなっている状況であった。ガソリンはリッター150円位であったのが、倍の金を出しても手に入りにくいとのこと。電気は、比較的条件のよかったイマドール村でも、1週間ごとに供給時間を決め、各地域で苦しいやりくりをしている。

私たちが日本を出発した2月13日から、支援地カイラリを含むタライ地域（ネパール南部インド国境沿いの東西に延びる細長い平地）でゼネストが始まってしまった。タライ地域は以前、マラリアが蔓延する森林地帯であったが、ネパールで数少ない平地であるため開発が進み、農業・工業・商業地帯として生まれ変わりつつある。ゼネストはその地域を地盤とする「マデシ」という政治グループにより起こされ、彼らはタライ地域の独立を要求している。タライ地域の人口が、現在、ネパールの人口の半分を占めるようになっているのに、この地域が過小評価されていることに不満を抱いているようだ。私たちはこのゼネストの影響で、カイラリ郡の近くまで行きながら引き返すことになってしまった。

ニルマラさんのお父さんを取材する米林さん

現在の支援そしてこれから

カイラリ郡のニムディ村・シセイヤ村では、ユースクラブの地域活性化プログラムや地域のグループリーダー強化のための研修などが予定どおり実施されたことを聞いて、ユースが順調に力をつけていることを確認した。

また、イマドール村でも、今回、日本でのユース交流プログラムに出席するため来日したスニタとススマが中心になり、人材育成センターでワークショップが行われた。ワークショップでは、女性の貯蓄や起業グループ、ユースグループと教師、父親グループ計30人ほどが集まり、それぞれの活動を報告してくれた。

また、斎藤さんによる折り紙教室も、和やかな雰囲気を作り出してくれた。今回の調査は、予定通り行かなかったことも多かったが、カイラリ・イマドール両地域でユースグループがコミュニティの要となり活躍していることが確認できた。また、ネパールの民主化にとって大変重要な、公正な選挙のための意識改革トレーニングは、カイラリとイマドールで行われ、イマドールでは、リーダー対象トレーニングが女性210人、男性70人に対して行われた。その他、20村でも500人を対象に公正な選挙をめざすキャンペーンが行われた。現在のネパールにとって、たいへん意義あることと思う。

ネパールチームでは、支援終了後もSOARSとの交流を続けていきたいと考えている。今回、人材育成センターを利用して、日本・ネパール交流ができないかを話し合った。人材育成センターは28人が宿泊可能で、集会室もあり、食事もできる。イマドール近郊の活動グループとのコミュニティ交流、それにネパール語研修や観光なども組み合わせた地球市民の交流プログラム、ぜひ実現させたい。

（ネパールチーム　米林大作）

折り紙を教える斎藤さん

初春のたんぼで洗濯？

ネパール現地調査に同行して

小さいタクシーの窓ガラスにおでこをくっつけてカトマンズ市街を見る。崩れかけたような古いレンガの家々、木や草は埃に、地面はごみにまみれ、何もかも、うごめく人々さえが汚れたような土色だ。想像以上に厳しい人々の暮らしぶりに、大いに心が乱れたまま20分も走ると車はわき道に入り景色は一変する。そこがイマドールで、優しく広がる緑のたんぼを見下ろすように人材育成センターは建っていた。

3階の部屋から見ると、自由な曲線であぜ道が延び、所々には積みわら、そして牛、遠くには菜の花や桃も咲いている。こんなのを見たら私は歩かずにはいられない。あぜ道は立派な公道で人が行きかう。たんぼの中でしゃがんで何かしている女の人がいるのでそっと近寄ってみると、洗濯をしている。そばには水がたまった大きな穴。後でニルマラさんに聞くと、雨期に降った水をそうして溜めておくのだそうだ。

私のネパール初日はそんな風に始まった。それからたくさんのものを見、聞き、いろいろな人に会い、ネパールのことで頭をいっぱいにして、混とんの市街。今日を生きる人たちの一人ひとりの顔が今度はよく見えてうれしかった。

（広報チーム　斎藤和子）

田んぼの中で
洗濯をしている

from Cambodia

シルク小物完成間近！

11月訪問時に、職業訓練センターで裁縫クラスのチーア先生たちと一緒に日本で売るシルク小物のデザインを考えた。そのサンプルが、「1ヶ月以内に送る」という約束をきっちり守って12月初旬、日本に届いた。「無事に届いた！」という感動を抑え、じっと隅々まで検品していくと、ほぼきれいにできあがっているものの、細かいところどころに不具合が見える。ブックカバーなどは、もともとカンボジアにはないものであることに加え、縦書きの日本の本とは開きも逆なためか、しおりとなる紐も変なところに付いていたりする。このままでは、日本の消費者には通用しない。同じころ、こちらで作ることになっていた、「Hope of Phnom Chiso」のネームタグが出来上がってきた。私たちが自信を持って売ることのできる製品をわかってもらうために、新たにクメールシルクチームの宮川さんがサンプルを作りカンボジアへ届けた。その後もサンプルのやり取りを繰り返し、最終的にたくさんの小物の発注をおこなった。

まだまだ試験的な段階ですが2月中旬に現地を訪問し、商品を持ち帰ります。皆様どうぞお楽しみに！

（クメールシルクチーム　筒井由紀子）

ブックカバーと巾着

カンボジアでサンプルを受け取り、現地NGO・VCAOのオフィスに持って行ってくれたLove & Peaceの浅石啓介さんからのメールです。

昨日、タグのついたサンプルを届けて来ました。代表のピデンさんとチーア先生は、「おぉ～！素敵なのができましたね！」と感動していました。チーア先生とは、どこを直すのかなどをじっくり話し合い、お互い確認し合いました。「一生懸命丁寧に作ります」と言ってくれました。タケオの生徒たちにも、「とにかく丁寧に作ってください。日本人はウルサイので」と念を押すつもりです。「同情で買ってくれる商品は長続きしない。やるなら本当に日本人にも認められる素晴らしい商品を作ろう」とピデンさんも言っていました。その言葉を聞いてちょっとホッとしました。でもまだまだ気は抜けませんね 。（笑）

地球の木連続講座に参加して
第2回 メタボライフの裏側で～支援地のくらし、私たちのくらし～

雪が降り積もった2月3日(日)、横浜市市民活動支援センターの会場は、温暖化の問題をいっしょに考え、私たちに何ができるのかを少しでも探ろうとする30名程の参加者たちの想いで、とてもあたたかだった。

第1部では、地球の木が支援活動を行っているネパール、ラオス、カンボジアのそれぞれのプロジェクトについて報告があり、さらに「支援地のくらし」の様子がたくさんの写真と共に紹介された。実際、現地に何度も足を運んでいる仲間たちからの報告は、支援地の人びとの様子を身近なものに感じさせてくれる。国の事情はそれぞれだが、人びとが皆で助け合って暮らしていること、地産地消の暮らしであること、水も電気も最小限の使用であり、自然エネルギーを利用していることなど。それらの話は、温暖化問題を生み出している「私たちのくらし」をより鮮明にあぶり出していく。そして温暖化が進み、氷河湖の決壊、水不足などで被害を受けるのは、まず彼らであると聞くと、私たちはもう身の置き所がなくなる。

第2部は、「私たちのくらし」を考えるということで、「食物」「森林」「エネルギー」「お金」の4グループに分かれて、地球温暖化を少しでも食い止め、将来に明るい展望を持つために、個人や地域でできること、企業や行政に働きかけることは何かなどをあれこれと話し合った。「個人でできることはささいなことであり、ほんの一歩であるかも知れないが、その人たちがネットワークを持ち、横につながりを持ったなら、企業や行政を動かすこともできる」という発表にうなずく。個人のシンプルな暮らしもさることながら、皆で協力し、声をあげていくことの大切さを再認識した。

2回にわたる連続講座に参加して、将来への道があることがわかり、少し希望が持てたのは、私ひとりではなかったと思う。（広報チーム　沼田由美子）

「何とかしなくちゃ！温暖化」

三浦ブランチ

大仏さまに見守られて……かまくら国際交流フェスティバル

11月11日、鎌倉の大仏で有名な高徳院で、恒例の「かまくら国際交流フェスティバル」が開催され、日頃から国際交流･協力の活動をしている団体が数多く参加しました。それぞれの団体がブースを持ち、模擬店、活動紹介などを行います。全体フロアでは、お茶席、琴、尺八、和太鼓やアルプホルンなどの演奏、空手演舞、バリ舞踊、各国の民族衣裳着付け体験等が行われ、楽しい一日になりました。

私たちも「地球の木・鎌倉」として、毎年参加していますが、今回は、物品販売とコーヒーで参加しました。カレンダーを毎年楽しみにして買ってくれる人もできたりしたのはうれしいことです。（三浦ブランチ　松本陽子）

地球の木サロン

「もっと多くの人に地球の木を知ってほしいね」そんな会話から地球の木サロンは生まれました。事務所はわずか8坪位のスペースですが、平日の6時以降や土曜日などに和気あいあいと皆で学び合っています。少人数の利点を活かし、お茶を飲みながら疑問点なども即解決です。是非一度地球の木サロンをのぞいてください。今回はその中のひとつアロマテラピーを紹介します。

アロマテラピー

今日は「ココロとカラダをときほぐすリラックスアロマテラピー」ということで、アロマオイルの作り方、マッサージの仕方を教わる。講師はプロのリフレクソロジストの資格を持つ藤原万梨子さん。

アロマテラピーは植物から抽出した芳香成分である「精油」の香りを楽しみながら、しかし単に香りだけでなく、精油の有効成分が鼻から脳、肺へ、また皮膚から血液中に吸収されストレス症状を緩和し、人間が本来持っている自然治癒力を充分に発揮させる療法とのこと。

テーブル狭しと並べられた精油の中で、特にリラックス効果の高いものの説明を聞き、香りを嗅ぐ。「私はこの香りが好き」「こちらもいいにおい」と、皆プリントを見て効用を確かめながら自分の好きな香りを探すのに真剣だ。ホホバオイルをベースに、選んだ精油を数種類、計10滴落としてよく混ぜる。一つひとつの香りはよくても数種類混ぜるとどのような香りになるのかを講師に確かめながらの作業。

リフレクソロジーといえば足裏を思い浮かべるが、今回は同様の効果があり、手軽にすぐできる手のひらのマッサージ法、つまりハンドリフレクソロジーを習った。ペアを組み、説明に従って、相手の腕、手のひら、指、手の甲とツボを押さえながらアロマオイルでマッサージをしていく。用意された、ゆったりとしたヒーリングミュージックをバックに、事務所に快い香りがただよう中で、される方はうっとりだが、マッサージする方は一生懸命。でも余り堅苦しく考えないでという講師の言葉に、「夫にしてあげようっと！」という声や、体調の悪い友人のためにアロマテラピーでできることはないかと講師にたずねる若い会員の姿もあった。アロマを通じて、健康、食事、美容と幅広い話題で時間が経つのも忘れる講座だった。（広報チーム　浜辺美英子）

バングラデシュ・サイクロン緊急支援報告

救援物資を受け取る女性

2007年11月15日夜半、ベンガル湾で発生した非常に強い勢力のサイクロン「シドル」がバングラデシュ南部沿岸地域を直撃しました。4,000人以上が亡くなり、600万人以上が被災するという大きな被害でした。地球の木では、ネパールのプロジェクトなどでつながりもあり、30年以上前からバングラデシュで活動してきた日本のNGO「シャプラニール＝市民による海外協力の会」を通じて、緊急支援を行いました。（緊急救援の予算から10万円を送金）

支援地域は、被害の大きかった南部沿岸部のバゲルハット県ショロンコラ郡、ボルグナ県各地などで、食糧や毛布（スラムの住民への配布を含む）、簡易シェルター用のビニールシートやロープの配布の他、池の水の浄化や飲料水用の井戸掘り、トイレの設置、衛生状況の改善作業などが行われました。

会報誌を通じて会員の皆様への呼びかけは行うことができませんでしたが、12月、1月に行われた「地球の木カフェ」「連続講座」などで募金を募り、41,658円（2月20日現在）が集まりました。ご協力ありがとうございました。

（事務局長　筒井由紀子）

自分の足で歩き始めた2人

地球の木会員の皆様、新しい支援の形として始めた「カンボジア里親の会」の活動も２年目を終えて、チャイルドケア・センターの子どもたち3人のうち、ソッチエ君、ソッチャイ君2人への支援は、20歳になりましたので今年度で終了しました。

ソッチエは、るしな代表の松本さんの経営するカフェで会計として働き始め、ソッチャイは、お寺での修行が終わり、農業を手伝い始めました。2人とも元気に働いています。これも皆様のご支援のおかげと、感謝しています。

また、妹のサッカナーは、高校への進学を楽しみにしています。会員の皆様、これからもご支援とご協力をどうぞよろしくお願いします。

（「カンボジア里親の会」世話人代表　佐々木慧子）

活動日誌（12月～2008年2月抜粋）

12月 1日　地球の木サロン「エッセイ修行」
3日　アフガンナイト（JVC現地代表藤井氏報告会）
8日　地球の木サロン「アロマテラピー」「バッチフラワーレメディ」
9日　みどり多文化フェスタ出展（ラオスチーム）
平塚国際交流まつりファッションショー（西湘ブランチ）
11日　第7回理事会
12日　地球の木サロン「実践英会話」
13日　第7回ブランチ連絡会
15日　地球の木サロン「ハングルに親しむ」
19日　地球の木サロン「Wine&Talk」（英会話）
20日　理事ミーティング
21日　地球の木カフェ
1月11日　生活クラブ生協神奈川新年会出席
12日　ラオス・カンボジア現地調査報告会
地球の木サロン「アロマテラピー」
15日　第8回理事会
16日　地球の木サロン「実践英会話」
17日　100人村ワークショップ（WE21ジャパン港南）
19日　地球の木サロン「エッセイ修行」「ハングルに親しむ」
20日　地球の木連続講座1　田中優氏講演会
23日　地球の木サロン「Tea&Talk」（英会話）
24日　第8回ブランチ連絡会・新年会
29日　「ラダック～懐かしい未来」を観る会（湘南ブランチ）
30日　地球の木サロン「実践英会話」
2月　2日　地球の木サロン「バッチフラワーレメディ」
3日　地球の木連続講座2「支援地のくらし、私たちのくらし」
6日　第9回理事会
9日　地球の木サロン「アロマテラピー」「エッセイ修行」
13日~21日　ネパール現地調査（西部/カトマンズ近郊イマドール村）
16日　地球の木サロン「ハングルに親しむ」
17日　フォーラム・アソシエ文化祭出店（オルタ館）
地球の木ネパールスタディツアー説明会
かながわ国際交流財団連続学習会
「地球の木」の活動と開発教育のこれから
18日~22日　カンボジア現地調査（タケオ職業訓練センター）
20日　地球の木サロン「Tea&Talk」（英会話）
21~29日　ネパールユース招聘プログラム
23・24日　「2dayワークショップin江ノ島」
26日　プロジェクト報告会・交流会
27日　中央大学ユースフォーラム

グローバルeye

軍隊と人道援助

理事　米林　大介

新年早々「新テロ対策特別措置法」が衆議院で可決され、自衛隊によるインド洋上での燃料補給が再開された。あいまいな名称だが、要は米国が始めた「不朽の自由作戦」に協力するということだ。国会での議論は、枝葉末節のことで終始したが、その中で私はPRT（地方復興チーム）という言葉が気になった。PRTとは、米軍に反感を持つアフガニスタン（以下アフガン）国民の支持を得るため生み出された構想で、軍が人道援助にも踏み出すものだ。100～300人の部隊が治安の確保をしながら、開発支援の専門家も加わり、またはNGOに働きかけ、PRT予算で住民へのプロジェクトを実施する。軍による人道援助というが、人道援助というのは、敵味方関係なく困っている人を助けるもの。ましてや、軍は多くの民間人を殺傷している。

昨年の12月3日、帰国中のJVC（日本国際ボランティアセンター）アフガン駐在員の藤井さんを地球の木に招き、アフガンの現状そしてPRTについても聞くことができた。 現在アフガンは、東西南北4地域に区分されNATOが中心のISAF（多国籍治安支援軍）が各地域に駐留している。JVCが活動する東部は、米軍が担当。首都のカーブルは復興バブルとのことだ。ISAFはアフガン国民の信頼を失っており、パシュトン人の居住地域を中心に治安は悪化している。PRTは25の都市で展開されているが、この構想は破綻しつつある。その理由は、＜•PRTの援助は軍事作戦に従属している •NGOも標的になってしまう •軍に技術的専門性がない •援助がばらまきで無駄が多い •数ヶ月で担当が変わる＞と藤井さんは語った。また米兵は個人的に話をすると、いい人が多いとのこと。私はタリバンも同じだろうと思った。

第9回総会のお知らせ

日　　時：5月31日（土）13：15～15：45
場　　所：オルタナティブ生活館2階「オルタリアン」
同時開催：「ラオスと共に歩んだ14年」
　　報告・交流会：10：30～13：00

総会の議事審議の前に、ラオス・カムアン県プロジェクトの現地パートナー、JVCラオスのスタッフ（ラオス人）を招いて、支援の歩みを振り返ります。お昼にはラオス料理を囲んでの交流会（参加費500円）もおこないます。多くの皆様のご参加をお待ちしております。

＊詳細は同封の「総会のお知らせ」をご覧ください。

オープンオフィス地球の木カフェ

期末セール★アジアンフェア★

日　時：3月22日（土）11：00～18：00
場　所：地球の木（関内駅南口徒歩1分）

年に一度の期末セールです。アジアのグッズが30%～70%OFF。
カンボジアの職業訓練センターのシルクグッズも到着しました。
美味しい飲み物や手作りのお菓子、カレーなどもご用意してお待ちしています。

地球の木カレンダー2008 ご協力ありがとうございました

「子ども日記@地球」は1,237部販売いたしました。ご協力ありがとうございます。
元気あふれる子どもたちの笑顔があなたにも伝わりますように。収益は地球の木の各支援プロジェクトに使わせていただきます。

年末募金キャンペーン2007報告

募金をありがとうございました。(2008年2月20日現在)

・ネパール・デブラニ募金	62,500円
・ラオス村びと支援募金	39,500円
・ネパール・幸せ分かち合い募金	42,000円
・カンボジア夢織募金	48,000円
・無　指　定	146,128円
・合　　計	338,128円

ネパール・カンボジア現地調査報告会

日　時：3月25日（火）13：30～16：00
場　所：地球の木（関内駅南口徒歩1分）

ネパール教育支援プロジェクトとカンボジア職業訓練センタープロジェクトの現地調査報告を行います。

地球の木サロンのお知らせ

地球の木サロンは、いつでも入会できます。
入会金、年会費不要。見学体験も受け付けています。
事務局までお問合せください。

ラオスってどんな国？

現地駐在スタッフによる最新報告と楽しいおいしい、そしてよくわかるラオス体験ワークショップです。

ラオスってどんな国だろう？
ラオスの人たちは何を食べているんだろう？
ラオスの人たちの生活について知りたい！

日　時：5月10日（土）14：00～16：30
場　所：横浜市開港記念会館9号室
　　（みなとみらい線日本大通り駅徒歩1分）
共　催：日本国際ボランティアセンター
参加費：700円
申込み：地球の木事務局

＊詳細は同封のちらしをご覧ください。

あーすフェスタかながわ2008

日　時：5月17日(土)・18日(日) 10：30～16：00
場　所：あーすプラザ（ＪＲ本郷台駅改札を出て左手）
詳　細：http://www.k-i-a.or.jp/earthfesta/

地球の木は今年も企画委員として関わっています。屋台では毎年好評のチヂミを販売します。本場直伝のチヂミをこの機会にぜひ食べにきてください。お手伝いも大募集！チヂミの焼き方を覚えませんか？
もちろん支援地グッズの販売も行います！

翻訳ボランティア募集！

地球の木の新プロジェクト「幸せ分かち合いムーブメント」の現地パートナー、カマルさんの書いた論文"Sharing Happiness through PRA"を英語から日本語に翻訳してくださるメンバーを募集しています。
またマンガルタール村の人たち、SAGUN、地球の木で作るニューズレター（ネパール語）の発行を計画中です。英語の要約を和訳して会員に伝えていきたいと思います。「幸せ分かち合い」の考え方を広めるために、ぜひ翻訳チームメンバーとしてご協力ください。
説明会を行います。参加ご希望の方は事務局までご連絡ください。

日　時：2008年4月19日（土）10：30～12：00
場　所：地球の木（関内駅南口徒歩1分）

★ボランティア募集！
発送作業、イベント手伝いなど

PRINTED WITH SOY INK
環境に配慮した「大豆インキ」を使用しています